

館蔵資料紹介 No. 23

< 明治文学 > というコスモス

林 正 子



< 今、明治が面白い > という標語を、この四半世紀、数年の周期で見聞きしてきたように思う。ちくま文庫版の『明治の文学』や岩波書店の『新日本古典文学大系 明治編』などが刊行されて、明治文学の網羅的な出版ブームが話題を呼んだり、司馬遼太郎の『坂の上の雲』をはじめ、名だたる現代作家の明治ものを愛読する人も少なくない。また、世の中が不景気になると『漱石全集』が編まれるという、嘘のような本当の話題にも事欠かない。

このように書くと、私の専攻分野が日本近代文学なので、鼻息の引き倒しになりかねないが、やはり現代人にとっての明治文学の魅力や存在意義については、どんなに強調しても高唱し過ぎることはないように思われる。

そこで、今回、岐阜大学附属図書館所蔵図書として紹介させていただきたいのが、『明治文学全集』（筑摩書房 1965～70）。明治という激動と変革の時代における政治・社会・思想・文化全般にわたる文学の粋が、体系的に編纂された一大コスモスである。

柳戸キャンパス図書館3階北側の〔文学〕コーナー開架書庫に、その全99巻 別巻1の100冊が並んでいる。渋めワインレッドの装丁は、落ち着いた、むしろ地味とも言えるものだが、設置された一角に立つと、明治人の叡智が醸成するオーラのようなものが漂ってくる（と感ぜられる）。



もっともこの全集はいわゆる稀覯本ではなくて、文学部国文学科/日本文学科などには100パーセント常設されていると言ってよい、日本近代文学を学ぶ者にとっての必須文献。日本史学や哲学・思想史の研究者にとっても、まちがいに重要文献である。その『明治文学全集』が、< 工学・医学中心の > という符丁がつけられることの多い岐阜大学にも、附属図書館にしっかり所蔵されているのが、私などにはとても嬉しく誇らしい。

* * * * *

担当させていただいている地域科学部1年生向け授業に、「文化基礎論」という必修科目がある。< 文明 > と < 文化 > の語義のちがいを確認したうえで、明治初年代から大正期までの文明評論を紹介し、近代日本の自己探究 近代化の時代、日本が日本をどのように認識してきたか の実相が、文明評論の諸編に具体的に投影されていることを考察するのが、この講義のねらいである。

福澤諭吉・田口鼎軒・田岡嶺雲・高山樗牛・姉崎嘲風・大隈重信・森鷗外・夏目漱石・中澤臨川・桑木嚴翼・金子筑水といった明治期のオピニオン・リーダーたち 今となってはあまり読まれなくなった人物も含まれているが、これらの評論家・作家たちの文章を引用して講義資料を作成している。この当時の文章は、現代の私たちにとってはかなり読みづらくなっているのが実情で、しかも授業では時間的に部分的・断片的な引用しかできないので、余力・関心に応じて、当該評論が収録されている『明治文学全集』の巻を読むことを、受講生にも推奨している。

『明治文学全集』の恩恵に浴する機会は、授業においてばかりではない。手前味噌で恐縮だが、昨年度の地域科学部企画の岐阜大学公開講座として、「近代日本の人物像 先人に学ぶ」を実施した。福澤諭吉・豊田佐吉・石橋湛山・河口慧海・夏目漱石・和辻哲郎・澤柳政太郎・土門拳の8人の人物像を8人の担当で開講したところ、予想を越える大好評をいただいた。

50名定員に対して66人の応募という受講者数は、特筆するほどではないかも知れないが、近代日本の先人たちの人生行路に照明を当てることで、当時の社会状況や精神文化を学び、現代の自分たちの生き方を考えさせられること大であった、というのが大方の受講者がアンケートに記して下さった感想。〈明治は遠くなりけり〉というのは、明治時代と現代との間に精神的な連続性や連関性を感じとっているからこそ生じる感慨なのではないか、と感じた次第である。

所定の手続きをすれば地元の方々にも大学図書館を利用していただけるので、公開講座の際にも、岐阜大学附属図書館所蔵の『明治文学全集』をアピールさせていただいた。

ちなみに、昨年度の評判に意を強くし、今年度も、「近代日本の人物像」(9月20日から10月11日までの4週の土曜日 13:00~16:50)の公開講座を予定している。中江兆民・伊澤修二・樋口一葉・野口英世・美濃部達吉・近藤康男・吉田茂・河上肇の8人が対象で、必ずしも明治期の人物ばかりではないが、また『明治文学全集』の何冊かを手にし、受講生の方々にもお薦めする機会がくるだろう。〈先人〉が生き、その思想と情感が息づいているコスモスの存在を、内緒にして独占するなんて、とてもできそうにない。

* * * * *

ところで、江戸時代の戯作文学から脱皮した明治文学については、資本主義の発展や知識階級の登場によって個人主義が勃興していった、近代という時代の反映としての特徴が挙げられるのが常である。評するに、〈自我の覚醒〉とか〈個性の尊重〉といったキー・ワードが用いられることも多い。『日本文学史[近代編]』といった類の専門書の解説には、西洋文学が自家薬籠中のものとされ、写実主義・浪漫主義・自然主義・反自然主義などの諸派が、百花繚乱の様相を呈して展開されてゆくという、〈明治文学〉を主人公とする〈大河ドラマ〉が記述されている。

明治期に文学の隆盛が導き出された要因のひとつは、雑誌・新聞を中心とするメディアの発達であり、文体としては言文一致が誕生、ジャンルとしては小説が普及、近代詩が発生し短歌・俳句にも革新運動が起こった、というのが、〈明治文学〉サクセス・ストーリーということになるだろうか。いずれにしても、それまでの体制や価値観の激変と変革の姿を映し出さずにはおかない明治文学は、標語どおり、本当に面白い(とってください)。



今年、生誕百年を迎えた明治生まれの作家、山本周五郎による講演の言葉が伝えられている。〈(関ヶ原の戦いがあった)慶長五年の何月何日に、大阪城で、ということがあったか、ということではなくて、そのときに、道修町の、ある商家の丁稚が、どういう悲しい思いをしたか(略)を探究するのが文学の仕事だ〉この〈文学の仕事〉の一端に関わりをもつ者として、言い得て妙だと感じ入るとともに、自分も〈悲しい思い〉の〈探究〉をめざしたいと素朴に願う。

だが同時に、文学研究/教育に携わる者としては、〈ということがあったか〉ということにも、とことんこだわってゆきたい。社会状況や時代精神を映し出す鏡としての文学の役割にも意識的であり、現象の歴史的背景や思想的要因に関する知識や分析を踏まえて、その文学の意義や価値を論じたいと希望するからである。

そんな自分のささやかな願望を反芻する時、明治文学の精華である『明治文学全集』全100巻は、いっそうの輝きを増し、私たちの生きるコスモスの可憐と無限を同時に感得させてくれる、それ自体がかけがえのないコスモスとなって現前する。そして、その意義を探究し、魅力を語らずにはいられない思いにさせてくれるのである。願わくは、あなたにとってもまた

「同じ名を帯びる秋桜^{コスモス} 大宇宙」(正子)

(はやし まさこ : 地域科学部教授)